

# 美術科が考える学びの価値

小倉 千絵

## 1 美術科が考える学びの価値

### 美と捉えるって無限だ

## 2 学びの価値の設定理由

### (1) 教科の特性から

美術科では、教科が考える学びの価値を「美と捉えるって無限だ」と設定した。そもそも、美術科における「美」とは何か、また、どのような「美」を価値とするのか。まず、本研究における「美」の捉えを明確にする。

金子一夫「美術教育の方法論と歴史」によれば、「美」とは、最も一般的として、「直接的体験において成立する精神的価値」と定義される。また、「芸術や自然にあらわれる美は、単一ではなく多様である。」と示しており、「美に関する諸概念」として、「美的カテゴリー」論と「美的理想」論の二つを挙げている。「美的カテゴリー」論では、「美」と「醜」を対立する基準を含め、「優美」「滑稽」「悲壮」「崇高」の六つに分類整理している。「美的理想」論は、特定の場（時代・地域）における芸術論や美的価値論に現れ、その時代・地域の規範となっている美的理念の分類を示している。（例として、日本の伝統美の「あわれ」「わび」「いき」、現代の「かわいい」等を挙げている。）また、人間が普遍的にもっている「美的能力」を「イメージ能力」と示し、個人の美的理想、あるいは、個人の美的判断能力を「趣味（taste）」、特定の場における芸術の典型がもっている質を「芸術類型（様式）」と示している。

これらを基に、学びの価値としての捉えさせたい「美」を整理する。まず、表現活動において捉えさせたい「美」として、個人の「美的能力」「イメージ能力」「美的判断能力（趣味）」に関わるもの、つまり、自分の内側から生み出される「美」とする。中学校学習指導要領（平成29年7月告示）解説美術編（以下、「解説」という。）の示す「造形的な見方・考え方」や「自分なりのイメージ」につながる「美」として、その可能性や無限性に学びの価値を見い出せるようにする。

次に、鑑賞活動において捉えさせたい「美」とは、「美的カテゴリー」論と「美的理念」論が示す「美」、つまり、自分の外側に捉えられる「美」とする。題材となる美術作品の「芸術類型（様式）」の理解を通して、解説の示す、「日本の美術」「諸外国の美術や文化」「生活や社会の中の美術の働きや美術文化」につながる「美」として、それらの多様性や無限性に学びの価値を見い出せるようにする。

以上のことから、美術科に関する資質・能力を育成する過程で、多様な感性と知性を働かせ、「美」と捉える価値を生み出すことは、本校全体基調の目指す「学びの価値を実感する生徒の育成」につながると考え、美術科における学びの価値を設定した。

### (2) 生徒の実態から

本校生徒の、「美」の捉えを明らかにするために、意識調査（令和5年5月実施、全学年387名に対して実施）を行った。「世界は美にあふれていると思いますか」の質問に対して、「思う（39.9%）、どちらかといえば思う（36.0%）、どちらかといえば思わない（16.6%）、思わない（7.5%）」であった。

「思う」と答えた生徒と、「どちらかといえば思わない」「思わない」と答えた生徒の合計数がほぼ同数であった。「世界」のイメージは、自分の世界、自分が生きる世界、地理的な世界など様々であるが、生徒の捉えがどの世界であるにしても、「美」という価値認識の差には幅があることが明らかになった。これまでの指導の在り方では、多くの生徒が、「美」は自分次第で生み出すことができる普遍的価値であることを理解したり、人間の創造力の無限性を実感したりするには至っていないことが分かった。

本校の卒業生は、政治や経済、金融、医療など様々な社会を担う職に就く傾向がある。「美」を捉える力の育成は、その感性と知性を社会に生かす礎となることも期待される。グローバルに活躍し、豊かな社会を創造する生徒の育成のため、「美の無限性」を価値として捉えることを学びの価値として設定した。

### 3 授業者が考える学びの価値を伝える工夫

#### (1) 「感性」と「知性」に働きかける導入の工夫

導入では、「おもしろそう」「楽しそう」という興味を駆り立てる以上に、「自分はどのような美を捉えることができるか」と、自分の活動や成長に関心をもたせ、「未知の価値を自分の中に生み出した」という自己実現の欲求を生み出す導入の仕組みを工夫したい。そのためには、多様な「美」を感じ取る「感性」と新たな価値を生み出す「知性」へ働きかけることが必要であると考えます。

「知性」とは、美術史を指すものではなく、知識の教え込みに偏ることは美術科の目指すところではない。しかしながら、「感性」に偏れば、美術との出会いは「楽しかった」「できなかった」という体験の記憶として過ぎ去ってしまう。それゆえ、これまでは主題設定などの言語活動として、多くの研究がなされてきた。しかし、どれだけ自分のイメージや感性を言葉にすることができても、「イメージ通りに表現することができた」「様々な方法の工夫があることがわかった」「頑張った」という満足感の熱が冷めれば、「だから何だ」という疑問と共に、体験の記憶として過ぎ去ることを否認しない。

そのような虚無感を味わわせないためには、やはり、自分の体験や学びを価値として高める「知性」が必要であると考えます。題材の導入や毎時間の授業の導入時に、美的理念に関する知的な情報や体験を意識的に取り入れ、美的価値の獲得の欲求を高めるアプローチについて、授業研究会での授業を通して、提案・検証できるようにしたい。

#### (2) 「美」を捉える力の段階設定と体験的学習の充実

美術科の目標とする「生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力の育成」は、生活を美しくする造形や美術の働き、美術文化についての実感的に理解を深める学習活動の工夫が求められている。「実感」とは、実際に体験したように感じることである。自分が生きている生活や社会の中にある「美」を捉えたり、美術文化として地域に受け継がれてきた美的理念の「美」を捉えたりするためには、美的体験を通してその価値を学ぶ体験的な鑑賞活動の充実が不可欠である。

ただし、3年間通した学びの深まりとして、どのような体験も発達段階に即したものでなければならない。本研究の学びの価値についても、学年の発達段階に応じて捉えることのできるよう、「美を捉える」力を次のように細分化した。①生活や社会の中の「美」を捉える力、②「美」を言語化する能力、③「美」を活かす能力、④「美」を問い直す力、⑤「美」を生み出す力、とした。

これらの力を育成する手立てとして、体験的活動の充実を図る。具体的には、本物の美術作品の鑑賞体験や多様な分野の美術専門家との交流体験、伝統文化や異文化の美術体験を工夫する。同じ空間の中で美術を肌で感じ、美的空間に没入する体験を通して、美術や美術文化について実感的な理解を深めることができるよう、本研究では、様々な美術体験の学習題材化を試みていきたい。

#### (3) 多様な他者と対話する学習活動の充実

本研究では、主体的で対話的な学びから多様な美的価値を生み出すことができるよう、体験的学習の充実の一環として、多様な他者との交流を重視する。また、生きた教材として「多様な他者」を捉え直し、それぞれとの交流から期待できる効果について仮説を立てる。

本研究が想定する「多様な他者」とは、①身近な他者（在校生、家族、教職員）、②多世代の他者、③異文化の他者、④専門家・有識者とする。表現と鑑賞のどちらの内容領域においても、これらの他者とのコミュニケーションを学習の手立てとする。

また、「多様な他者」との交流から期待できる学びとして、①における交流では、生活を共にする人々との価値観の違いに気付き、自分の「美」の捉えを自覚することが期待できる。②における交流では、年齢や時代によって「美」の捉えは変容することに気付き、未来の自分がどのような「美」を捉えているのか、価値意識と時間軸の関係を捉えることが期待できる。③異文化の他者との交流では、特定の場所や地域に根付く美的理念の違いに気付き、自分の「美」の捉えのルーツや諸外国の美術文化に関心をもつことが期待できる。④専門家・有識者との交流では、自分がとらえた「美」を美的理念に結び付け、知的に認知したり、「美」を表す語彙力を高めたりすることが期待できる。これらの「多様な他者」との交流によって、「美」という普遍的価値を捉え、感性を豊かにし、よりよい社会を創造する力を育成したい。